

2013 年 8 月 22 日

2013 年度
川上村地域づくりインターン
報告書

静岡文化芸術大学
文化政策学部 2 年
中込恭輔

1、はじめに

私はもともと過疎地域、限界集落のまちづくりに興味があり、何か自分にできることはないかと考えていた。そんな中ゼミの先生に今回のインターンのお話をいただき参加した。事前学習を進めるにつれ、川上村が奈良県でも過疎化や高齢化が進んでいる地域ということを知った。2週間のインターンで多くのことを学ぶことができた。本報告書ではインターン事業の内容、2週間の滞在で感じた川上村の良い点と悪い点を述べ、水源地のむらづくり、観光、高齢者支援、林業についてそれぞれ課題を考察し、それに対する提案を行いたい。

2、インターンの内容

	体験内容	備考
8月6日	インターン事業説明、村長挨拶	
8月7日	村内散策 樽丸づくりについて	樽丸づくりは春増薫さんからお話を伺った。
8月8日	環境基本計画について 下多古集落調査	環境基本計画は生活環境課の杉村さんのお話を聞いた。
8月9日	森と水の源流館見学 達ちゃんクラブ手伝い 水源地の村づくりについて 東谷製作所見学	
8月10日	達ちゃんクラブ手伝い	スペシャルそうめん流し
8月11日	春増さんからお話を伺う ふるさと市場見学	
8月12日	水源地の森見学 柏木、上谷散策	
8月13日	林業家の東辻秀和さんからお話を伺う 川上村立図書館の前田ひろみさんにお話をうかがう 大滝ダム、防災ステーション見学	
8月14日	北和田盆踊り手伝い	
8月15日	林業学習、下多古村有林見学 東川盆踊り参加	
8月16日	「白い犬」山本直美さんのお話を伺う 報告書作成	木工関係のお話

8 月 17 日	かみせ祭手伝い	
8 月 18 日	報告会準備	
8 月 19 日	報告会	

川上村の良い点

- ・豊かな自然がある
- 水源地の森など
- ・歴史ある吉野林業
- ・水がきれい
- 水源地の村づくり
- ・様々なイベントが行われている
- 遊水フェスタ、達ちゃんクラブなど
- ・環境学習に力を入れている
- 水源地の森ツアーなど
- ・観光施設が充実している
- 森と水の源流館、もくもく館、杉の湯など

川上村の悪い点

- ・林業の衰退とそれに伴う諸問題がある
- 村内の雇用が減少した
- ・高齢化、少子化が進んでいる
- ・村内の人口減少が進んでいる
- ・スーパー、コンビニが少なく、ほとんどの集落から距離が遠い
- ・車がないと移動が大変
- 地形的問題と公共交通の整備の問題

水源地のむらづくりについて

水源地のむらづくりは川上村の総合計画の根幹にもなっており様々な取り組みが行われている。水源地のむらづくりの考え方の大元となっているのが 1996 年に発表された「川上宣言」である。川上宣言は 5 条からなっている。1 条で「川上は、水がつけられる場に暮らす責任として、下流にはいつもきれいな水を流します」と誓っており、この考え方に基いて各種取り組みが行われている。川上村は 1999 年に約 10 億円で天然林を買い取り「水源地の森」として保全に努めている。森と水の源流館では水源地の森の説明や、エコツアーなどが行われ、学習に役立てられている。和歌山市と「水源地保護に関する協定」も結ばれている。しかし、「上流の思いは、本当に下流の人たちに届いているのか」という疑問は残る。循環の中できれいな水を流しつづけるということは簡単なことではない。

提案：水源地の株券の発行

- 目的
- ・下流に住む人への意識づくり、共に行う森づくり
 - ・森林の管理・維持費の調達
 - ・川上村の取り組みを全国へとアピールするきっかけづくり

- ・川上村を訪れてもらうためのきっかけづくり

水源地の株券とは

- ・川上村が株券を発行し、それを買ってくれた人（株主）に何かしらの優待をする。
- 川上村のきれいな水、杉の湯の招待券、村の特産品・商品券
- ・PRは全国に向けて行うが、実際のターゲットは吉野川・紀ノ川中流、下流に住む人々に絞る
 - ・株券で得た資金が使われた森で、株主と一緒に森づくりなどの体験学習を実施する
- きれいな水と森との関係性を理解してもらい、川上村の重要性をアピールする

この取り組みは株とはいっても募金の延長線のようなものである。しかし、募金と違い一方通行ではなく、何にお金が使われ、自分にどんな利益があるか知り、体験するという双方向な関係こそが特徴である。

観光について

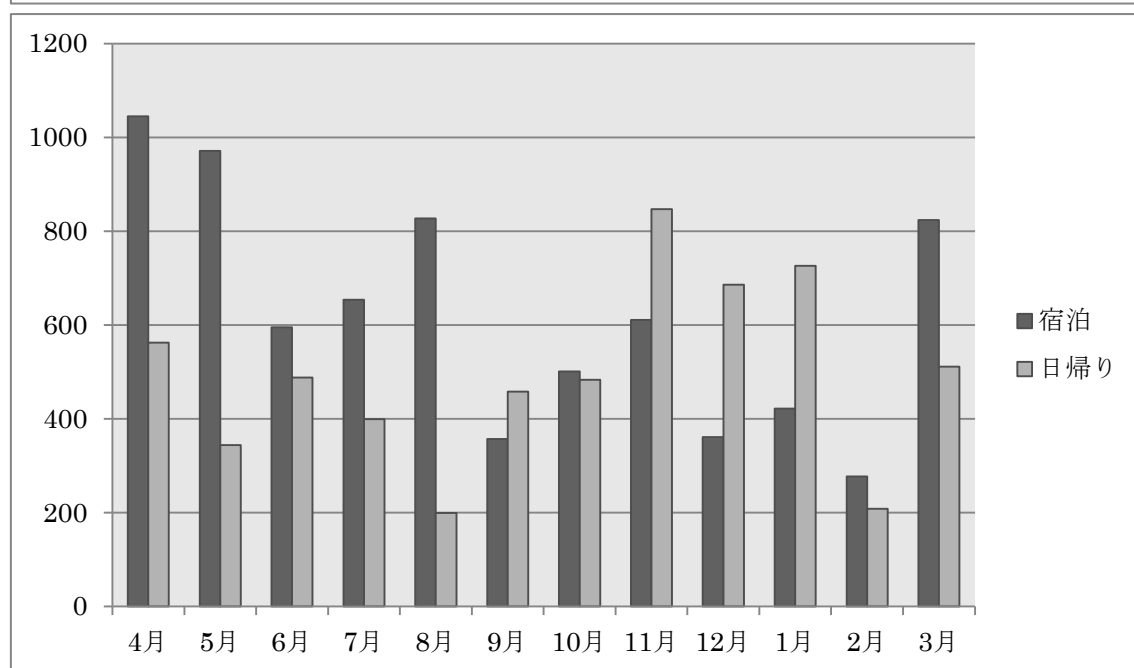
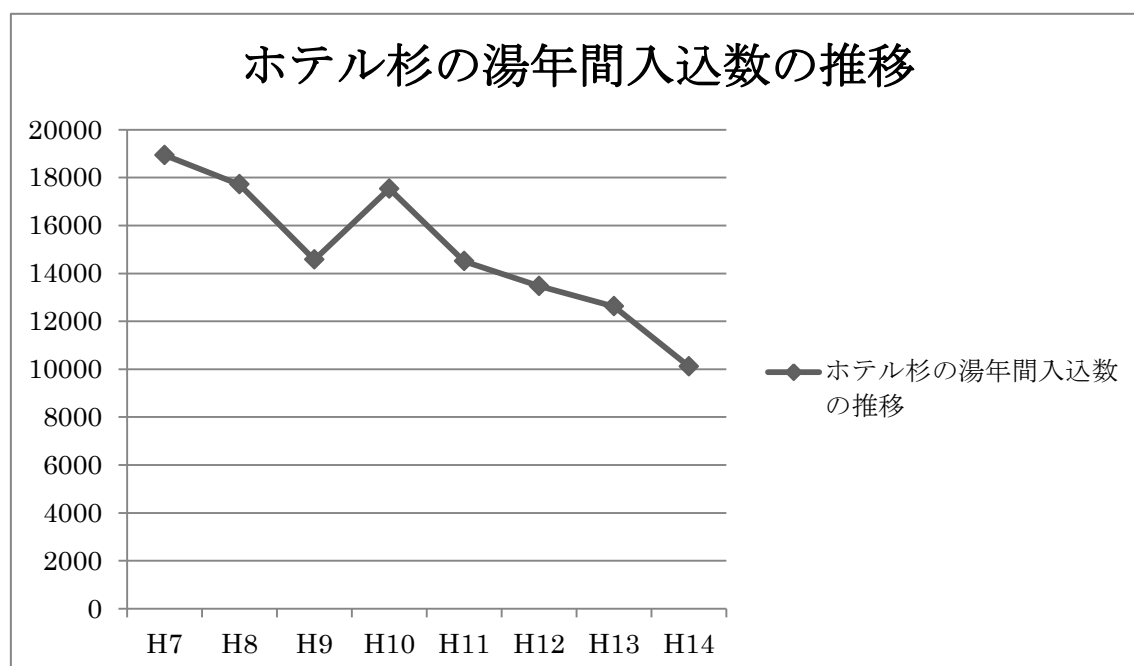
川上村には、自然環境、歴史的遺産とともに、観光や林業等を活かした諸施設、祭りやイベントなど観光資源は充実していると感じた。2週間の滞在で下記の場所に行くことができた。

- ・吉野川源流「水源地の森」
- 村が購入した約 740ha の天然林。
- ・歴史の証人（下多古村有林）
- 日本最古の人工林。樹齢 250～390 年生の杉・檜の林が今も保存されている。」
- ・大滝ダム・防災ステーション
- ダムの役割、防災のことを学ぶことができる。
- ・森と水の源流館
- 川上村の森と水のことを学ぶことができる。年間を通じて体験プログラムを実施。
- ・蜻蛉の滝
 - ・明神滝
 - ・山幸彦のもくもく館
- 吉野林業の歴史や吉野杉の特徴、林業から生まれた文化や暮らしの知恵などを展示。
- ・入之波温泉
 - ・道の駅「杉の湯」
- ホテル杉の湯に隣接する道の駅。

課題①：道の駅「杉の湯」の営業時間について

2週間の滞在中、何度か道の駅を利用したが、17時までの営業ということを知らずに18時頃に行ってしまう閉まっているということがあった。その日はちょうど日曜日で道の駅には休憩している多くの人が居た。店が開いていれば飲食をしたり、おみやげなどを買っ

てくれるのに非常にもったいないと感じた。そこで提案として利用の多い週末だけでも営業時間を延ばしより多くの人に利用してもらってはどうか。



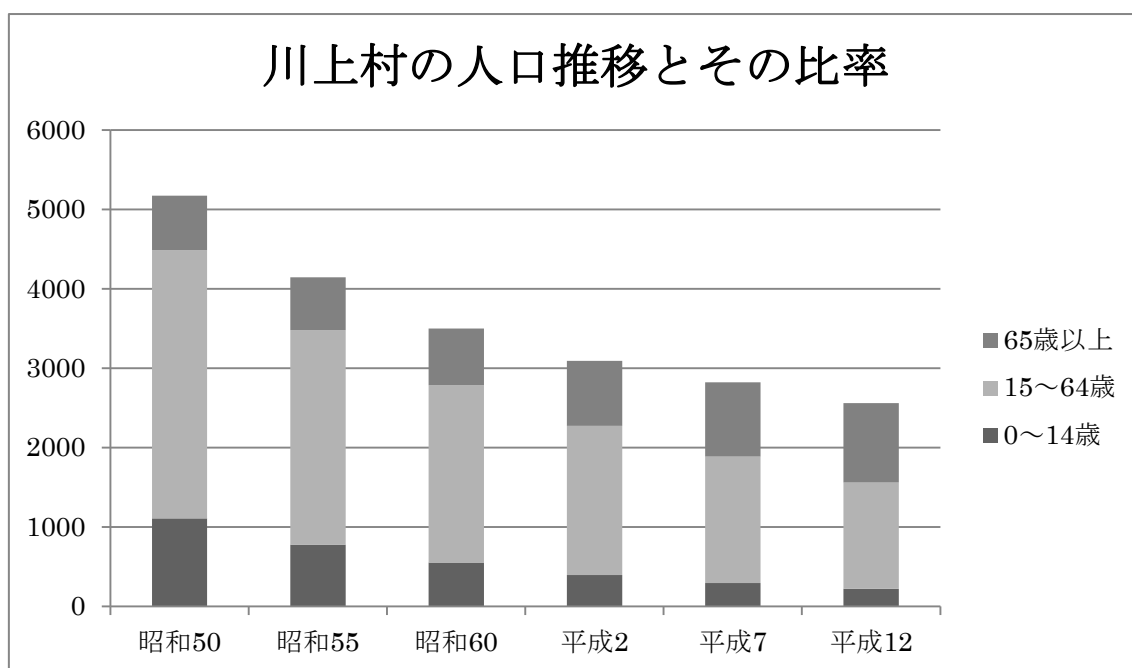
杉の湯利用客数（平成 24 年度）

上記グラフは平成 24 年度の杉の湯の利用客数を宿泊と日帰り別で表したものである。杉の湯の日帰り入浴の受付は 2 時までである。2 週間の滞在中、受付終了時間が早すぎるという声を何度か聞いた。なぜ 2 時で受付を終了するかというと、宿泊客に配慮しているということだ。ではここでグラフの 11 月～1 月をご覧いただきたい。その 3 か月間は宿泊客

を日帰り客が大きく上回っている。この期間中は温泉だけでも入りにくる人が多くいるということなので試験的にでもこの3か月だけ日帰り入浴の受付時間を延ばすことを提案したい。

高齢者支援について

川上村の人口は、大正時代から昭和30年代半ばまで約8千人前後で推移していた。しかし、その後、急激な人口流失により、平成12年度の国勢調査時には2,558人にまで減少した。主な原因としては高度経済成長期から始まった大都市への人口の流失と、ダム建設に伴う水没時の村外移転が多かったことや基幹産業である林業の衰退などがあげられる。また下記グラフからもわかるように近年に至るまでも人口減少は続いており、現在では1,800人をきったと言われている。また、年齢別に見ても65歳以上の年齢層の割合が非常に高く平成12年の65歳以上の人口比率は39.1%といち早く超高齢化社会となっている。



高齢者の方が安心して暮らせる環境を作らなければならない。安心して暮らせる環境を作るには車を運転できない方への買い物の支援と一人暮らしのお年寄りの方への支援が必要であると考えた。村づくりアンケートの[川上村のよくないところ]という項目では、「働く場の不足」、「交通が不便」、「買い物の不便」という3つが上位に挙がっていた。まず買い物が不便となっている原因は、やはり急峻な山が多い地形や最寄りのスーパーまで距離があるというこの2つが考えられる。集落内の商店で事足りない場合はどうしても車を運転する必要がある。その場合車を運転できない方やひとり暮らしのお年寄りの負担は大きい。現在そういった方は身内に頼むかヨシノストアの移動販売や奈良コープを利用し食料

品、生活品を得ている場合が多いとお話を伺った。もしもそういった手段がなくなったときの不安は大きい。また一人暮らしの方も自分の身に何か起きたときのことを不安に感じているという声もあると聞きました。そこで、役場がヨシストやコープと連携し、買い物支援及び一人暮らしの方の健康確認を行うことを提案したい。すでに行政と企業が連携して同じようなサービスを提供している事例があるので紹介する。

事例紹介：ヤマト運輸「まごころ宅急便」

「まごころ宅急便」とは買い物支援とお年寄りの見守りサービスが合わさったような事業である。利用者の注文を福祉協議会が受け取り、地元スーパーへ発注する。地元スーパーへ発注された品物をヤマト運輸が集荷し、配達する。その際ただ配達するのではなく、安否確認や健康チェックを行い福祉協議会に報告する。それにより福祉協議会がその地域の高齢者の様子を把握しやすくなる。ヤマト運輸の方では担当の家が決まっており、毎回同じドライバーが届けてくれるので利用者の安心感も大きい。この事業の長所は新しくインターネットなどを設置しなくても安否確認ができる点と、機械ではなく人対人であるという点である。短所は企業の利益がでにくい点である。現在行われているヨシノストアの移動販売も利益は出していない。

現在利用されているヨシノストアの移動販売や奈良コープと連携し、「まごころ宅急便」をベースとしたサービスを提供することを提案したい。

林業について

吉野林業には 500 年の歴史があり、川上村の基幹産業として盛んに行われてきた。近年は、安価な輸入材の増大や建築様式の変化に伴う木材需要の低下などにより、全国的に林業は低迷している。川上村の吉野林業も例外ではなく、林業家の高齢化や若い担い手不足という問題に直面している。川上村の基幹産業である林業の衰退はそのまま村の衰退へと繋がるので解決策を考えなければならない。現在の課題を「需要の拡大」と「新しい担い手の育成」の二つとし提案を行いたい。

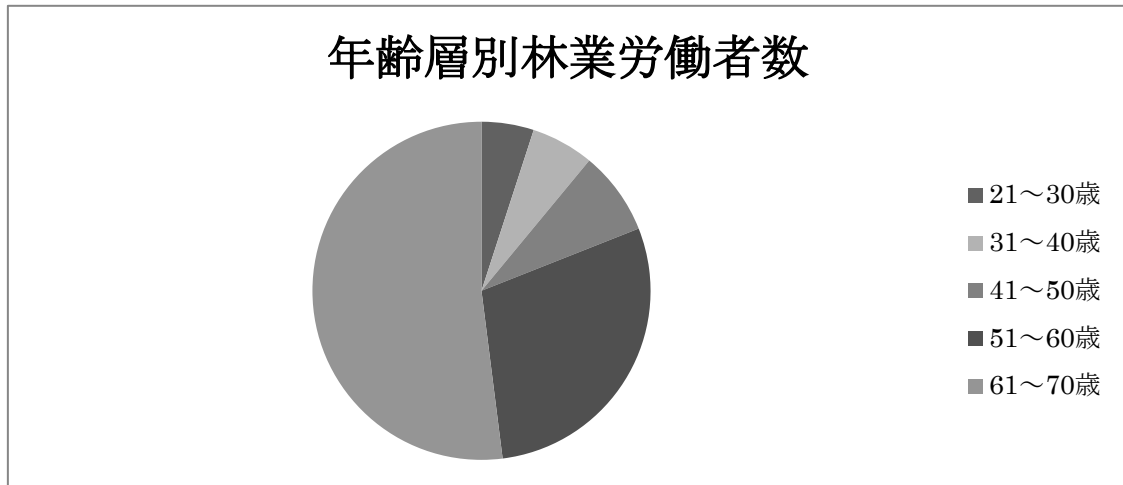
「需要の拡大」に対する提案

需要の拡大を考えるに当たりまずは吉野杉の特徴を下記にまとめた。

- ・密植により木がまっすぐ成長し、建築材として優秀である。
- ・木の根元と末の太さの差が小さい。
- ・香りが良く、酒の香りづけに使われている。
- ・色がきれいで源平がくっきりと現れる。
- ・年輪が細かく強度が高い（杉の中では）
- ・木目がきれいである。

このような特徴のほとんどが密植や間伐といった工程を行い生まれたものである。手間と時間がかかっており上質な分、生育のコストも大きくなる。かつて吉野杉はブランドとして受け入れられていたが、先も述べたように建築様式が木目を多く見せる和風建築から木目をほとんど見せない洋風建築へと変化したことにより吉野杉の特徴が生かせなくなってきた。建築材としての需要の減少により、吉野杉の需要は大きく減少した。木材にとって建築材としての需要というのはそれほど重要である。そこで需要拡大のため木材を多く使った建築や木質の日用雑貨を使うライフスタイルの提案を川上村発で行ってみてはどうだろうか。しかし、建築にせよ日用雑貨にせよどうしても値がはってしまい個人への売り出しや普及は難しい。そこで今回は個人以外への売り出しを考えたい。売り出し先としてまず考えられるのが企業のオフィスである。職場環境を良くするために、わざわざオフィスを田舎へ移す企業もある。オフィスを移すのには大きいコストがかかり、限られた企業しかできない。そこで都会でも自然を感じられる木材を多く使ったオフィスをデザインし、木質のデスクやチェアなどのオフィス用品を勧めてみてはどうだろうか。

次に考えられる売り出し先は学校である。特に県内の学校への売り出しを提案したい。現在全国各地で地産地消を謳い、地元の木材を多く使った学校が増えてきている。さらに文部科学省も木材を多く使った学校には一定の教育効果があるとし、その推進を図っている。しかし、学校の改築などはそう頻繁にあるものではない。そこでまずは古くなった机、いすなど部分的にでも吉野杉を使用したものを販売してみてはどうだろうか。学校で使われることにより環境学習に繋げやすくなるし、勉強する環境としてはよりよいのではないだろうか。



現在川上村の林業労働者は減少傾向にあり、上記のグラフからもわかるように高齢化も進んでいる。なぜ若く新しい担い手や後継者が育たないのか。もちろん林業の衰退というのが大きな原因であることは言うまでもない。しかし、林業という仕事の特殊性や川上村の特異な地理も関係していると考えられる。新しい担い手を育てるにあたって問題となるのが「収入が安定しないこと」と「雨の日の仕事が確保できないこと」という2つである。まず、収入が安定しないのは前提として自然を相手にしていることもあるし、日本の木材の現状も厳しい。やる気があってもお金にならなかったら新しい担い手は集まらない。そこで安定した収入を保障するために年収を設定し、そこに達しなかった分は補助を出すというようにして林業を安心してできる環境をつくることはできないだろうか。次に雨の日の仕事であるが、雨が降ったら基本的には危険なので山に入らないほうが良いとされている。実際多くの林業労働者の方がそうされている。だがそうはいても、林道をしっかり整備し雨の日も仕事をして、週休2日を実現している企業もあるという話を伺った。だが個人レベルではやはりそれは難しい。梅雨のように雨の多い時期は、仕事が激減するが、逆に忙しい時期は休む暇もなくなってしまう。川上村のように専業で林業をしている人ばかりという地域は少なく、通常は農林業という感じで農業の片手間に林業があるか、またはその逆ということが多い。よって雨が多いからと言って仕事が激減することはない。だが、川上村には農業に適した広い平坦地は少なく、水稻は一切行われてはおらず、畑作も小規模なものがほとんどであるから、農林業という形をとることは難しい。もしくは林業労働者が雨の日のできる林業に関連した副業があればいいがそちらも難しい現状である。これらの問題は、解決策をまだまだ考えなければならないので考えていきたい。

現在新しい担い手の育成において、全国森林組合連合会が「緑の雇用」事業というものを行っており、それを利用している林業家の方もいる。「緑の雇用」事業とは未経験者の人でも森林の仕事に就き、林業で必要な技術を学んでもらうため、審査の結果認められた森

林組合などの林業事業体に採用された人に対し、同事業体などを通じて講習や研修を行うことでキャリアアップを支援するという制度である。対象は20～30代の人で県が窓口となっている。研修の費用などは国から補助金が出る。

2週間の滞在の中で林業関係のお話は多くの方から伺うことができたが、問題の難しさを目の当たりにするばかりだった。正直2週間という短い期間ではこれといった解決策はでこなかったし、多くの取り組みはもうすでに行われていた。浜松も天竜の林業が有名であるので、林業のことはこれからも考えていきたい。

おわりに

2週間のインターンでは、多くの方から貴重なお話を聞いたり、様々な場所を訪れたり、お祭りなどたくさんのイベントに参加させてもらったりと多くの経験を積むことができた。その中で、川上村の素晴らしさや村民の方の優しさを知り、どんどん川上村のことが好きになった。それと同時にいろいろなことを学ぶにつれて川上村が抱える問題も知ることができた。実際に過疎地域や限界集落を自分の目で見て自分の認識の甘さを実感した。本気でそのような地域と関わっていくなら、自分はまだまだ勉強不足だと思った。この気持ちを大学でも学びのモチベーションにしていきたい。今回の報告では過疎や限界集落という面の問題にあまり触れることができなかった。なにか提案をするには、やはり勉強が必要であると感じた。

最後に2週間という短い期間ではあったが、多くのことを得ることができ、成長することができたと感じています。このような経験ができたのも、村役場の方や村の方々のおかげです。今回自分たちの活動に関わったすべての方にお礼申し上げます。ありがとうございました。

今後も川上村のことは気にかけていきたいし、また訪れさせていただきたいです。どのような形であっても川上村と関わっていきたいと考えています。本当にありがとうございました。